ずいそう

タビ　たび　旅

高　橋　　馨

「旅をしない人は哀れな存在です」：モーツァルト。旅好きの私が言えないことを，天才はあっさり言ってのけた。思えば，異国の自然・歴史・文化に触れるのが楽しみで，これまで20回ほど海外旅行をした。国内旅行では味わえない感動や発見など，思い出の一端を披露させていただく。

初めての海外旅行は平成3（1991）年の夏，念願のモーツァルトの生地・ザルツブルクを訪れた。この年は彼の没後200年（不肖・生誕60年），ザルツブルク音楽祭が祝祭大劇場で開催されるが，チケットは入手が困難で諦めていた。ところが，JTBが「魔笛」と「ドン・ジョバンニ」のチケットつきツアーを催すことを知って飛びつくように参加，二晩に亘って本場のオペラを堪能した。そのあと，ウィーンのシェーンブルン宮殿劇場で「フィガロの結婚」を観ることができ，3大オペラを楽しんで大満足。ウィーンから空路パリへ，快晴のもと機窓から眼下の山野を眺めた。およそ230年前，7歳のモーツァルトは父と姉とともに馬車に揺られ，3週間もかかってパリへ辿り着いたことに思いを馳せるうち，1時間で到着した。

平成7年の秋，イタリアへ旅した。ローマ，ミラノ，ヴェネツィアなど主要な観光地を訪れたが，私のお目当てはフィレンツェ。ウフィツィ美術館で名画を観たあと，ミケランジェロ広場から巨大なドゥオモを中心に広がる“屋根のない美術館”と称される街並みを眺め，しばし眼福にひたった。ローマは名所や史跡が多いが，スリが多いことでも有名。普通の女の子の服装（なり）をしたジプシー娘が2・3人で新聞などを持って観光客に近づき，スリを働くので注意するよう言われていた。カメラを下げて店を見ながら歩いていると，いいカモに見えたのだろう。2人娘がぶつかってきたが，とっさに体をかわして事なきを得た。

平成9年の夏，チェコ，ハンガリーなど東欧諸国へ旅した。初めに訪れたのはモーツァルトにゆかりが深いプラハ。市内を流れるモルダウ（ヴルタヴァ川）に架かるカレル橋（1357年建造）を渡って丘の上のプラハ城や修道院を見学，9世紀に遡るという歴史をひしひしと感じた。プラハからブダペストへ向かう途中，ドナウ川の畔の古城（要塞）に寄り，襲来した蒙古軍からの戦利品などを見たが，ここでも歴史を実感！

平成11年の夏，北欧4国へ旅した。最初に訪れたのはコペンハーゲン。夕方，散歩に出て自転車の店があったので価格を見ると日本円で約7万円，消費税が20％と知って驚いた。翌日，港の波打ち際にある有名な“人魚姫の像”を見た。対岸には数基の発電用風車が回っていたが，海に囲まれたデンマークは風力発電が盛んで全発電量の5％を賄っているという。オスロでは国立美術館でムンクの「叫び」を観たが，同じような絵画が何枚かあった。夏空のもと，公園では多くの男女が半裸で日光浴を楽しんでいた。

世界の最高峰エベレスト（8,850 m）を見るのが多年の夢だったが，平成12年の夏，宮城県山岳連盟が企画した「エベレスト・パノラマ・トレッキング」でその夢が実現した。参加者は10人（うち女性3人），カトマンズから小型機でエベレスト街道の玄関口・ルクラへ飛び，4日間かけてタンボチェ（標高約4,000 m）まで歩く。ベテランのシェルパ頭が率いる若いシェルパ，ポーター，コック計15人が同行し，テントや食事など一切の世話をしてくれる。途中，初めてエベレストを遠望したときは感激！　その後も数回見たが，いつも雪煙が上がっていた。カトマンズに無事に戻ったあと，エベレスト遊覧飛行に参加。操縦席から眼前の名峰にカメラを向け，夢中でシャッターを切った。

平成19年春にスペイン，初秋にエジプトへ旅した。スペインはバルセロナ，マドリードなど主要な観光地を訪れたが，当時は経済が順調なようであった。エジプトでは40℃の炎天下でピラミッド，“王家の谷”など多くの遺跡やアスワンハイダムを見学したが，政情も安定していて不思議な活気が感じられた。両国の現状を見るにつけ，いい時期（とき）に訪れたと思う。

ボスポラス海峡を挟んでヨーロッパとアジアに跨るトルコ。その美しい海峡を見たい一心で，昨年トルコへ旅した。シルクロードの要路だっただけに世界遺産の遺跡が数多くあり，観光客も多い。政教分離で宗教的な争いがなく，ヨーロッパ諸国の不況を尻目に経済が好調との印象を受けた。

広い世界のほんの一部を旅したに過ぎないが，「アラブの春」や「欧州危機」など激動する世界の動きを少しく実感できる。これからも健康を保ち，タビたび旅をしたい。

――たかはし　かおる　豊国工業㈱　東北支店　顧問――